



地域日本語支援ニュース こだま 第 271 号

2015.2.26



★—メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます—★

【地域日本語支援ニュース こだま】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会(AJALT)発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。

====目次=====

1■AJALT 主催公開講座■

取材レポート「落語、新しいつながり」柳家さん喬師匠

2■防災情報・3月11日を前に■

=====

1■AJALT 主催公開講座■取材レポート

「落語、新しいつながり」 柳家さん喬師匠
—落語を通して外国人に日本語と日本文化を紹介する—

2月20日(金)にAJALTが主催した公開講座「落語、新しいつながり」の様をご紹介します。柳家さん喬師匠は1967年五代目柳家小さんに入門。1981年真打昇進。弟子や後進の育成の傍ら、世界各国の日本語学習者に小噺や落語を通して日本語表現や日本文化理解を深める活動を続けていらっしゃいます。こうした活動は、各地の日本語教育関係者から高く評価され、2014年国際交流基金賞を受賞されました。
☆☆☆☆☆☆☆☆

当日は約250名の参加で、開演前からほぼ満席でした。壇上には演壇ではなく高座が用意され、会場のうしろから師匠がお囃子とともに登場し、軽快な語り口で会場を笑わせながら始まりました。前半は落語に対する外国人の方々の反応やエピソード。後半は「長短」「時蕎麦」「芝浜」がたっぷりと演じられ、会場は最後まで熱気に包まれていました。

終了後、講座に参加された皆様のご感想を伺いましたので、以下にそのいくつかをご紹介します。

◆参加者の声◆

「ちょっとしたことなんですが、男の人と女の人がしゃべっている場面がずっと入ってくるというのは不思議。なで肩にしたり、ちょっといかたたりで区別がつく。声も違いますし。不思議ですよ。」

「外国の学生さんが、実際どういう反応をするかとか、どんな活動を作っていくのかがとてもおもしろかった。」

「落語を日本語教育に生かせるとは思わなかった。小噺を外国の人が音で理解して、自分にひきつけるんですね。本物はわかる、と思いました。」

「さん喬は名人だね。」

「素晴らしかったです。授業で落語をとりあげたりしているので、大変に参考になりました。落語は日本の若い人の間でも最近人気が高くなっていますね。日本語を正面からとらえてお話を聞いた姿に感動しました。」

「公開講座さん喬師匠のお話にとっても感銘を受けました。師匠の日本語教育を受けた方々が、自分たちの力で小話を作り、同じ勉強仲間を笑わせることができるとは！！驚きました。日本の話芸って素晴らしいんですね。最後に、落語を三席も熱演してくださりありがとうございます。ほんとはスタンディングオベーションしたかったのですが恥ずかしかったのでやめました。」

「日本語教育関係者ではありませんが、落語が好きなので、今日来てみました。海外で落語をやっていると聞いたときは、英語で落語をやっているのだと思っていましたが、今日の講演を聞いて、日本語でやっている、しかも外国の方がしっかりつばを押さえた落語を作っていると知って、驚きました。すごいと思いました。」

「英語でアップルパイとでてきたら、日本の味噌汁だと思え、と教わりましたが、日本語を落語で学ぶということは、日本語と日本文化を同時に学ぶには最適な方法だと思いました。そのことを考えついた先生はすばらしいですし、海

外で学ぶ学生が『オチ』まで考えられるようになるほどに、様々なご苦勞と試行錯誤をくりかえしながら、教えていらっしゃるさん喬師匠の熱意に感動いたします。「芝浜」の浜は芝の浜でなくてもよい、自分の持っている浜でよいのだとこちらが気づかされたという師匠の言葉に師匠の謙虚さと、学生の学ぶ力を感じました。文明の衝突から、あちこちで大きな争いが起きている昨今、暖かい話を聴けて＜人間ってすてたもんじゃないのに＞と思った次第です。」

「名人になっても謙虚に学ばれていることに感銘を受けました。二八そば、目に浮かんできてももわず生唾ゴックン。」

★講演の写真や、さん喬師匠のインタビューは6月発刊の機関誌「AJALT」38号にも詳しく掲載されます。ぜひご覧ください。
